

内野泰子（早稲田大学）

I. はじめに: コミュニカティブ・アプローチの中で軽視される英文和訳・和文英訳演習

コミュニケーション能力の育成を第1の目的とするコミュニケーション・アプローチの実践が大学の英語教育において強く求められるようになる中で、大学英語クラスでの英文和訳・和文英訳演習についての議論は極めて少なくなっているように思われる。また、議論される場合でも、英文和訳や和文英訳はコミュニケーション能力の育成を阻む旧式で排除すべき教授法であるかのような扱われ方をすることが多いように思われる。1994年9月発行の『英語教育』(1)に掲載された「雑誌掲載主要記事一覧」(『英語教育』、『現代英語教育』、『英語展望』、『新英語教育』など12誌の1993年1～12月号に掲載された主要記事をリストアップしたもの)を見ても、英文和訳、和文英訳を直接論じたものは1件もない。代わって、リーディング指導については「直読・直解」による多読を奨励する記事、また、ライティング指導についてはレトリカル・オーガニゼーション中心の「パラグラフ・ライティング」に重点を置いた記事、すなわち、母国語を介在させない教授法をめぐる記事がこのリストの中心をなしている。しかし、英語クラスでの英文和訳・和文英訳演習といった活動はコミュニケーション・アプローチの実践を促進するために、果たして、できるだけ排除すべきもののなのであろうか。本稿では、コミュニケーション・アプローチの見地に立って、学習者の英語コミュニケーション能力の育成に役立つ1つの方法としての英文和訳演習の可能性、また、そうした英文和訳演習をベースにした和文英訳演習の可能性について考察してみたい。

II. コミュニカティブ・アプローチへの誤解

ここでまず明らかにしておきたいのは、“コミュニケーション・アプローチ”についての解釈である。コミュニケーション・アプローチは、反復的なパターン・プラクティスをベースに英語を構造的に習得することに重点を置いたオーディオ・リンガル・メソッドが実際のコミュニケーションを軽視しすぎたものであったという反省から、英語教育の第1の目的をコミュニケーション能力の育成にもっていこうとする“アプローチ”であるが、Anthony(2)は、“アプローチ”、“メソッド”という2つの語の違いを次のように定義している。

“An approach is a set of correlative assumptions dealing with the nature of language teaching and learning. ... It describes the nature of the subject to be taught.”

“Method is an overall plan for the orderly presentation of language material, no part of which contradicts, and all of which is based upon, the selected approach. An approach is axiomatic, a method is procedural.”

すなわち、コミュニケーション・アプローチとは、“オーディオ・リンガル・メソッド”におけるパターン・プラクティスのように特定の学習方法を規定したものではなく、本来は、“コミュニケーション能力の育成”につながるなら、使用される方法やテクニックは限定さ

れないものである。Richards and Rodgers(3)は、コミュニカティブ・アプローチには、“strong version”と“weak version”があり、前者は「実際のコミュニケーションを行いながら言語を学ぶ」という考え方、後者は「コミュニケーションの手段として使えるようになるために言語を学ぶ」という考え方であると指摘し、現在では“weak version”の方が主流を占めるようになってきているとしている。特に、後者の“weak version”の場合には、多様な方法を導入することが可能なはずである。Finocchiaro and Brumfit(4)は、コミュニカティブ・アプローチの“weak version”における翻訳演習について“Translation may be used where students need or benefit from it.”と述べている。また、母国語の使用についても“Judicious use of native language is accepted where feasible.” “Reading and writing can start from the first day, if desired.”などと指摘している。

コミュニカティブ・アプローチについて論じる場合には、「コミュニケーション能力」の定義も明らかにしておく必要があるが、現在、英語教授法の教科書などに引用されることが非常に多い1980年のCanale and SwainによるCommunicative Competenceの4分類(文を構築するために必要な語や文法についてのGrammatical Competence/文を越えたディスコースを構築するのに必要なDiscourse Competence/社会文化的規則を考慮したコミュニケーションの必要なSocio linguistic Competence/コミュニケーションがブレークダウンしないようにするために必要なStrategic Competence)では、コミュニケーション能力は「話す・聞く」には限定されていない。Bachmanをはじめ、多数の研究者が多様な定義や分類をその後も提示しているが、この点についてはいずれも同様である。

すなわち、このようにコミュニカティブ・アプローチとは、本来、英文和訳演習や和文英訳演習を排除しようとするものではないし、母国語の介在を否定するものでもない。また、「話す・聞く」に偏重したものでもない。従って、英文和訳、和文英訳演習についても、これらを旧式の学習方法として排除するのではなく、コミュニケーション能力を育成する有用な1つの手段として活用することができるのではないかと考える。

III. 翻訳演習導入反対派の論拠

コミュニカティブ・アプローチと英語授業における翻訳演習は本来、相入れないものではなく、“weak version”では許容されているはずのものであるが、日本のみならず、米国をはじめとする諸外国の英語教授法の論調でも、翻訳演習は、現在不人気である。Duffはその著書Translationの中で次のように述べている。

“... today translation is largely ignored as a valid activity for language practice and improvement. And even where it is still retained, it tends to be used not for language teaching, but for testing...” (5)

Duffは、不人気の理由として、①読む・書くの2技能しか育成することができず、Oral Interactionを伴わない、②翻訳とは学習者個々人の作業なので、クラス全体の活動として取り上げるには不適當であるし時間もかかる、③文学作品をとりあげた場合には学習者の一般的なニーズに適さない、④学習者は母国語を使用する必要がある、これは望ましくない、⑤翻訳とはこれを実際に行う学習者にとっても、また、これに目を通し、間違いを訂正する教師にとっても退屈といった諸点が指摘されているとしている。

一方、田崎清忠氏(6)は、これらに加えて、①内容をつかむことより外国語を母国語に置き換えることのみに精力が注がれ、内容を掴んだように錯覚する、②両言語間に意味や機能の完全一致などあり得ないのに、両言語は単に文字や構造が異なるだけという誤解が生じる、③外国語を母国語に置き換えないと理解動作が行えないようになる、④会話などの実用的な言語運用が無視される、⑤知的偏重主義に陥り知能の高い学習者のみ高成績を収めるようになるなどの諸点が翻訳演習の問題点として指摘されていると述べている。

さらに、米山朝二・佐野正之両氏(7)は、①翻訳では複雑な文章表現の解読が要求されるため、学習者が話し言葉に対して侮蔑的な態度をとるようになる、②母国語による逐語訳を内容理解と混同してしまうなどの問題点を指摘している。

Duff、田崎、米山・佐野氏の指摘にすべて共通しているのは、「翻訳反対論者は母国語の介在が翻訳演習の問題点であるとしている」という点である。しかし、日本のように、英語が外国語にすぎず日常語は母国語であるEFL(English as a Foreign Language)環境においては、英語学習における母国語介在のマイナス面だけではなく、プラス面にも目を向ける必要があるのではないだろうか。

米山・佐野氏は、Wilkins(8)が「外国語学習で母国語の使用が許されるのは、①入門期のごく最初の時期の指示、②新しい文法事項の説明、③リーディングやヒアリングなどの受容的な活動のあとの内容理解チェックといった場合に限定される」としていることを指摘しているが、このような消極的な母国語の介在ではなく、翻訳演習を通じて、もっと積極的かつ効果的に母国語である日本語を英語学習に介在させていく方策もあるのではないかと考える。

IV. 翻訳演習導入賛成派の論拠

コミュニケーション・アプローチ推進論者の中にも、少数派ではあるが、コミュニケーション能力育成のために、翻訳演習を英語クラスで積極活用して行こうという意見が見られる。前述のDuff(9)は、こうした賛成論者の論拠として、①翻訳には、正しい答えというものがないから、クラスでの議論に適しており、こうした議論の過程でオーラル活動を導入することもできる、②翻訳という活動を通じて、文法面での正確さだけではなく、意味を明確に伝達するための「クラリティ」や「フレキシビリティ」も養える、③特定の文法事項などを母国語との比較で検討できる、④現実の世界で翻訳は必要とされるものであるから学ぶ価値があるなどといった諸点をあげている。

Duffが指摘している上記の論拠③にオーバーラップするが、Snell Hornby(10)は、翻訳演習を積極的にクラス活動に導入する論拠として、オリジナルの言語(source language)と翻訳文の言語(target language)の関係についての「sensitivity」が磨け、両言語間の「interlanguage relationships」についての探求心を育てるとしている。また、Perkins(11)も「翻訳演習によって第1言語と第2言語の間の構造面、意味面、スタイル面の相違を認識することができ、第2言語能力の向上につながる」と指摘している。

田崎氏(12)も、これら三者と同様、翻訳の利点として、「翻訳すると英語と日本語の違いが

はっきりわかるし、副産物として日本語の感覚を育てられる」との論があることを指摘し、(1)英語の話し言葉に堪能でない教師でも利用できる、(2)知的に偏重した内容を扱えるので、教師は知的優越性や権威を保てるなどといった利点も加えている。

上記のような翻訳賛成論者の論拠に共通するのは、母国語と学習対象言語の比較対照を行うことによって、学習対象言語のみを学ぶより明確に学習対象言語の特徴を知ることができるという点である。つまり、反対論者の論拠でもあった母国語の介在を逆手にとって、そのプラス面を言語学習の武器として使うことができるという訳である。結局、母国語は使いようによっては、言語学習の阻害要因とも、促進要因ともなり得るということであろう。

V. 授業での英文和訳演習を依然支配する「英文法訳」

日本の英語教育界の論調が「コミュニケーション重視/英文和訳・和文英訳演習軽視」に傾いているにもかかわらず、大学の英語教育の現場では、英文和訳・和文英訳演習があまり見直されることなくかなりの程度行われており、コミュニケーション能力の育成という見地からすると、残念ながら翻訳反対論者が指摘するような阻害要因として働いてしまっている場合も少なくないと思われる。

早稲田大学語学教育研究所が先頃、同大学学生2425人を対象にして行った「語学教育に関する学生の意識調査」(13)でも、英語購読の授業に対して、「ただテキストを見て訳していくだけではつまらない」、「訳読中心の授業が多いが、すでに読解力は十分なので無意味」、「日本人教師による訳読より外国人教師による会話の授業を」、「興味がない教材をだらだらと読み進めテスト前に訳文を覚えていけば単位がとれる授業」、「外国語教育が文章を訳すことに偏りすぎており、会話・口語が軽視されている」、「文章を訳すことで評価を加えたり、テストを行っているだけでつまらない」、「テキストを訳しているだけでは、元の文(英文)を本当に理解したことにはならない」、「購読のみの授業は高校の延長でしかない」、「必修の語学の授業は高校で教えられている方法と何ら変わらず、ほとんどコミュニケーションとしての語学という観点からなされていない」などといった批判の声が学生からあがっていることが指摘されている。

訳読を中心とした授業に対してこうした不満が生じる原因の1つは、先に述べてきたように、母国語(日本語)の介在方法(すなわち、どのような日本語に訳出するのか)に問題があるからではないだろうか。この問題を探求するうえで、現在の大学の英語クラスの英文和訳活動では、どのような訳文(日本語)が学生から出され、それを教師の側も“acceptable”なものとして授業を進めているのか、まず、センテンス・レベルで考察してみたい。下記にあげた英文和訳例は、早稲田大学ならびに立教大学の1,2年次のクラスで学生から出された実際の和訳例であり、これらは高校まで、あるいは、大学1,2年までに彼らが馴染んできた「英語クラスでの英文和訳」をある程度反映しているのではないかと考える。

(英文法訳例)(14)

(1) Japan's general election has brought nearly 40 years of one party rule to an end.

(日本の総選挙が40年近く続いた1党支配を終わりにもっていった。)

(2) I will succeed him.

(私が彼を後継する。)

(3) A jury deliberated for one-and-a-half days before convicting him of five murders.

- (陪審員団は彼を殺人5件で有罪にする前に1日半審議した。)
- (4) Kim Campbell, a 46-year-old lawyer from Vancouver, became the first female minister of Canada.
(キム・キャンベール 46歳のバンクーバー出身の弁護士ーはカナダ初の女性首相になった。)
- (5) The Education Ministry decided Tuesday to publish anti-AIDS pamphlets for distribution among high school students, following a reported rise in the number of AIDS cases among people under 20 years of age.
(文部省は火曜、20歳以下の人々の間のエイズ患者数について報告された上昇をうけて、高校生配布利用にエイズ防止パンフレットを発行することを決めた)
- (6) Women in the workplace undeniably are advancing.
(女性は職場で否定できないほどに前進している。)

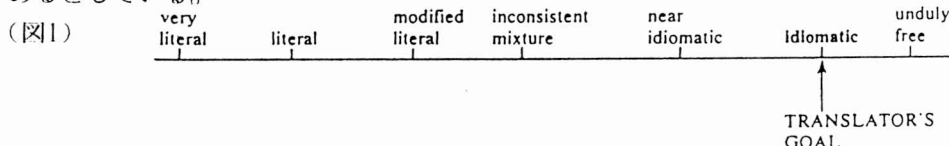
以上の学生の英文和訳実例を概観して感じるのは、彼らがいかに英語の表面的な構造をなぞる英文和訳に馴染んでいるか、また、その結果出てくる不自然な日本語に疑問を感じていないのかということである。これらは、いずれも日常的な自然な日本語としては存在しないもので、一般に「逐語訳」とか「直訳」とか呼ばれるものである。しかし、高橋泰邦氏(15)はこうした英文和訳を学習した文法事項をあてはめただけの「英文法訳」と名付けている。この呼び名はこうした訳の本質をまさにうまく映し出しているものと思われる。「英文法訳」を実際のコミュニケーション手段としての“communicative translation”に対して、学習目的の翻訳として“pedagogical translation”と呼ぶESL/EFL専門家もいる。

上記の学生の和訳実例は、いわゆる翻訳調の日本語であるとも言えるかも知れない。柳父章氏(16)は、古来から漢文の訓読に慣れてきた日本人は、欧米の文化を大量に吸収するために、この訓読を英語にもあてはめて、英語の「語」をむりやり日本語の「語」に対応させて、英語の情報を「翻訳調」の日本語に移し変えて大量に吸収してきたとしている。確かに、文法事項の理解を確認したり、英文の情報やメッセージを大まかに伝達するという目的のためだけなら、「英文法訳」や「翻訳調」で十分な場合、あるいは、そうした訳が必要な場合もあるだろう。特に、学ぶべき文法事項が多数存在する高校レベルまでの英語クラスでは、教師が学生の文法事項についての理解をチェックするために、故意に「英文法訳」のみをテストや授業での正解とする場合もあるかも知れない。しかし、大学レベルの英語クラスで、書いたり話したりする能力も含めたコミュニケーション能力を育成しようという場合には、先の学生の実例に見られるような「英文法訳」をよしとするような英文和訳演習からは脱却する必要があるのではないだろうか。

VI. 「書く」、「話す」能力の育成を念頭に置いた英文和訳演習

それでは、コミュニケーション能力の育成を目的にした英語クラスでは、英文和訳演習でどのような日本語訳を目指すべきなのかを、次に考えてみたい。すでに、述べたように、翻訳演習を英語授業に導入すべきとする論者は、翻訳により両言語の比較対照を行うことができているが、前項であげた学生の英文和訳実例のような「英文法訳」は、日本人が通常使用している日本語からはずれたものであり、普通の日本人の受け手(読者)にとっては不自然な響きを持っている。英文和訳演習を通じて両言語の比較対照を目指す場合、「原文の自然な英語」と「翻訳文の自然な日本語」をつき合わせてみて、初めて、両者の発想の本質的な違いや類似点が浮き彫りになり、英語で書いたり、話したりする際にも適用できるコミュニケーション能力につなげることができるはずである。従って、英文和訳演習でも、こうし

た目的を果たそうという場合には、英文法訳、逐語訳、直訳、翻訳調、pedagogical translationではなく、日本人の読者にとって最も自然な形の日本語への訳出を目指す必要がある。Larson(17)は、翻訳の分類を下記のような図を用いて示しているが、英文法訳で出て来た前述のような日本語は、very literal～literalに属するものであろう。一方、受け手(英文和訳の場合には日本人)にとって自然な言語(英文和訳の場合には日本語)で書かれた翻訳をLarsonは"idiomatic translation"とし、翻訳を行う場合のゴールとすべきであるとしている。



Larsonは、"idiomatic translation"について、さらに詳しく次のように述べている。

"Idiomatic translation uses the natural forms of the receptor (target) language both in the grammatical constructions and in choice of lexical items. A truly idiomatic translation does not sound like a translation. It sounds like it was written originally in the receptor (target) language.... The translator's goal should be to reproduce in the receptor (target) language a text which communicates the same message as the source language but using the natural grammatical and lexical choices of the receptor (target) language...."

翻訳文の読者にとって自然なこうした翻訳を生み出すための、センテンス・レベルのプロセスをNida(18)は、変形生成文法の立場から、source languageで書かれた原文の文章の表層構造(surface structure)を、それが出てくる以前の基本的な"kernel"(核文:研究社・新言語学辞典によれば、深層構造(deep structure)に別の文が埋め込まれていない最も簡単な構造)にback transformationし、target languageと共通項が得られるところまでも行き、それを今度はtarget languageの適切なsurface structureに再度transformationするといった段階に分けて説明している。

また、安西徹雄氏(19)は、このプロセスをより分かりやすく分析し、まず原文の深層の意味構造を十分に分析し、これを受容言語(receptor language)に転移し、しかる後に、受容言語(われわれの場合には日本語)でもっともふさわしい表現へと再構成するという、三つの段階を経なくてはならないとし、これを説明するため、The dog's attempts to climb the tree after the cat came to nothing. といった例文をあげている。同氏は、アンダーラインを施したこの例文の主部の部分について、名詞構文中心の英文では名詞句として主部を構成しているが、本来は、"The dog attempted to climb after the cat."の意味、それもattemptsと複数であるから～attempted～many times."のことであるとしたうえで、動詞構文中心の日本語に置き換えるなら「犬は猫のあとを追いかけて木に何度も登ろうとしたが、無駄だった」とするのが適切であるとしている。「猫を追って木に登ろうとする犬の試みは無に帰した」という直訳、英文法訳では、名詞構文のsyntaxをなぞって日本語に置き換えただけであるから、動詞構文中心の日本語との比較対照までには至らないが、安西氏の試みたような自然な日本語への"idiomatic translation"のプロセスを経ると、両言語の根本的な相違が浮き彫りになり、英語発想の本質もよく見えて、今後、学習者が英語発想による英語らしい英語を書くうえで、あるいは、話すうえでプラスに作用するものと考えられる。

それでは、先の英文法訳例で示した英文にもう一度もどって、これらを"idiomatic

translation”まで、もっていった場合にどのような日本語が出てくるのか、また、日英両語のどのような発想の違いが見えてくるのかについて検証してみたい。

(Idiomatic Translation例)

- (1) Japan's general election has brought nearly 40 years of one party rule to an end.

日本では総選挙が行われ、(その結果)40年近く続いた1党支配が終わりを告げた。

(無生物主語の文章は、日本語では主部を状況や理由などに訳出した方が適切なことがあることが分かる。)

- (2) I will succeed him.

私が彼の後継者となる。

(無生物主語ではないが、日本語ではS/V/Oの表現より、～状況とした方が適切。)

- (3) A jury deliberated for one-and-a-half days before convicting him of five murders.

陪審員団は1日半審議したうえで、彼を殺人5件に関し有罪とした。

(原文ではbeforeとあり、英文法訳では、それをそのままぞって訳しているが、

日本語発想では、上記のようになる。”idiomatic translation”によって、英語と日本語の前後に関する発想の違いを知ることができる。)

- (4) Kim Campbell, a 46-year-old lawyer from Vancouver, became the first female prime minister of Canada.

キム・キャンベル氏は、カナダ初の女性首相となった。

同氏はバンクーバー出身の46歳の弁護士。

(英語には名詞の修飾表現として、日本語にはない上記のような同格表現があることがはっきり分かる。)

- (5) The Education Ministry decided Tuesday to publish anti-AIDS pamphlets for distribution among high school students, following a reported rise in the number of AIDS cases among people under 20 years of age.

文部省は20歳未満のエイズ患者が増大しているとの報告をうけて、高校生に配布するためのエイズ予防パンフレットを発行することを火曜、決定した。

(reported riseという英語の名詞表現中の修飾語reportedは、日本語では「詞表現」もっていった方が分かりやすいことが分かる。)

- (6) Women in the workplace undeniably are advancing.

女性の社会進出が進んでいることはまぎれもない事実である。

(英語では副詞だが、これを日本語では述語に転じた方が分かりやすい場合もあり、訳出のプロセスでは品詞の転換がポイントになることも分かる。)

以上のように、自然な日本語までもっていった”idiomatic translation”と原文の意味構造を比較検討してみると、まさに、英語発想と日本語発想の違いがくっきりと浮かび上がってくる。従来、上記のような、英文和訳上の”テクニク”は、文芸翻訳家や実務翻訳家の技として”art”あるいは”craft”的なものとして考えられ、一般の英語クラスでの使用はあまり論じられてこなかったように思われるが、読む、理解するだけでなく、書く、話すといった技能の育成にもつながる英語発想への1つの橋渡しになるのではないかと考える。

なお、”idiomatic translation”をクラスで試みようとする、直訳ではなく意識をすればよいのですか?という質問がしばしば学生から出てくるが、意識とは原文の意味内容をできるだけ再現することに重点を置いた翻訳であり、”idiomatic translation”はさらにそれに加えて「自然な日本語」「翻訳文と感ぜさせないような日本語」を目指したものであることを学生に理解させる必要があるだろう。

以上、英文法訳を卒業した大学の英語クラスで目指すべきと考える”idiomatic

translation”をセンテンス・レベルで考察してきたが、当然のことながら、語やセンテンスのレベルだけでは実現できるものではなく、ディスコース・レベルや社会・文化レベルでの配慮も必要となる。次項では、そうした諸点も含めた実際の英語クラスでの指導例を考えてみたい。

VII. “idiomatic translation”を英語授業に導入する場合の留意点と授業実践例

“idiomatic translation”を授業に導入しようとする場合には、まず、英語と日本語を比較対照して英語発想を知る、というその目的を学生にはっきりと認識させることが必要であろう。さもないと、英語の授業で何故やたらに日本語にこだわらなくなてならないのかという疑問が学生の側に生じることになり、十分なモチベーションが得られない。

また、翻訳対象としてとりあげる教材は、文学作品であると、翻訳時に作家独特の文体についても多大な考慮が必要となり、自然な日本語、についての議論の余地が大きくなるので、できるだけ標準的な文体の評論文や新聞記事といったものが適当であろう。また、将来、書く、話すといったアウトプットを生み出す糧としてのインプットとして教材を考えた場合には、社会人になってからアウトプットとして求められることが多い手紙文やメモなども、学生のニーズにかなっているかも知れない。

なお、授業の目的は、書く、話すといったコミュニケーション能力の育成にまでつなげることにある訳であるから、英語と日本語の発想の違いを認識するにとどまらず、英語で実際に書く、話すといったなんらかの“productive”な活動を授業に盛り込む必要があろう。さらに、テストなどで、学生の英文和訳を評価する場合には、教師は学生がこれまで不自然と感じずに慣れてきた英文法訳は“acceptable”ではないという方針に立ち、より一層“desirable”な“idiomatic translation”により高い評点を与えるようにして、学生をモチベートする必要がある場合もあろう。

では、次に、こうした諸点に留意したうえで、実際の授業展開例を考えてみたい。

(教材実例) (20)

Dear Mr.

During COMDEX Fall 1993 in Las Vegas, a member of your sales staff, Mr. Dale Jarrett, informed me of a possible opening for a Manager in your Dealer Sales Division. I believe that my extensive background in the office machine industry qualifies me for the position.

I was with the Technology Inc. Dealer Division from its formation in 1989 to its phase out last year. During this period, I was involved in all areas of dealer sales.

Between 1991 and 1992 I served as Assistant Manager of the division. My education and work experience are detailed in the enclosed resume.

I will be happy to meet you at your convenience and provide additional information you may need. You can reach me either at my home address or at (913)233 1552.

Sincerely,

上記は求職のレターであるが、学生が将来こうしたレターを書く必要性に直面することもあるのではないかと想定して、教材として選定した。このレターを日本人にとって自然な日本語にするためには、センテンス・レベルだけではなく、英語商用文と日本語商用文の違い

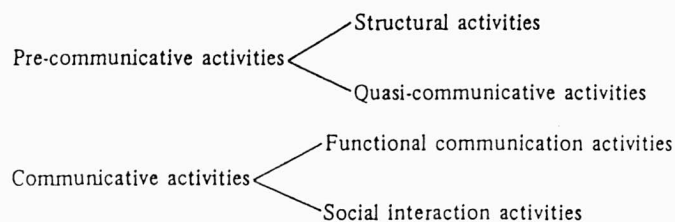
いを社会文化的なレベルやディスコース・レベルからも考慮することが必要である。すなわち、例えば、相手方の会社について、英語では単純に“your”ですまされているが、日本語の商用文では相手方の会社に対しては「御社/貴社」といった敬語表現が用いられることなども翻訳にあたって留意する必要がある。また、このレターの構成を分析してみると、「空席の可能性を知った経緯」「その空席に見合う自分の経歴」「相手からの連絡を請う表現」といった単刀直入なものとなっている。このレターを「時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます」「から始まり」「何卒ご高配のほどお願いいたします」といった日本語商用文の構成に直してまで翻訳する必要はないと考えるが、こうした日本風のスタイルとの比較検討をクラスでのディスカッションなどで試みると、ディスコース・レベルでの両言語の発想の違いが明らかになる。

センテンス・レベルでは、英語発想と日本語発想の違いがはっきりと目立ち、将来英語で書いたり、話したりする時に役立ちそうなものについて、特に注意を払った和訳を行うことが必要であろう。上記のレターでは、“...my extensive background in the office machine industry qualifies me for the position.”といった箇所があるが、この無生物主語の名詞構文の英文から自然な日本語訳「私は事務機器業界で広範な経験を積んでおりますので、その職に適任です」を導き出すことができれば、この英文の主部が理由を表す節の意味を含んでいることが分かる。こうした日英両語の表現法の違いが分かると、これまで「～なので」という日本語に対しては、常に、because、as、sinceなどを用いて和文英訳してきた学生は、英語発想による異なる表現法を知ることになる。ただし、ここで終わってしまっただけでは、日英両語の違いを認識しただけで、「書く」「話す」といったproductionにまではつながりにくいので、今度は、「日本語から英語へ」、逆のプロセスを経ることによって発想の相違についての認識の定着化をはかることが望ましいのではないかと考える。そのためには、この教材を使って学習した次の回の授業で、「私は～その職に適任です」という日本語を再度示し、これをオリジナルの英語に直させる復文法を導入することもできよう。また、「私は銀行業務に長年の経験を積んでいるのでマネージャーとして適任です」などといった多少変化を加えた日本語を示してこれを和文英訳させることもできよう。こうした英訳演習は板書などでも可能であるが、オーラル・コミュニケーションの要素を組み込もうという場合には口頭でも行うことが可能である。

VII. 終わりに コミュニカティブ・アプローチにおける英文和訳演習の位置づけ

実際の授業で行われているにもかかわらず、最近ではあまり議論の対象とならない英文和訳演習であるが、「どのような日本語に訳出するのか」「また」「それをどのように英語によるproductionにつなげるのか」を考えることによって、「直読直解」や「パラグラフ・ライティング」などの新しい教授法を補完する効果的な英語コミュニケーション能力育成手段となるのではないかと考える。

Littlewood(21)は、コミュニケーション教育の方法を下記のように分類し、
(図2)



|コミュニケーション能力の育成をはかるのには、コミュニケーション活動だけではなく、そのベースとなるpre communicative activitiesも必要である|としている。そして、pre-communicative activitiesをさらに細分し、英語の構造だけに注目した"structural activities"と、構造とその構造がコミュニケーションで果たす可能性がある機能的意味("potential functional meaning")の双方に注目しcommunicative activitiesへの橋渡しとなるような"quasi communicative activities"に二分している。この分類に従って英文和訳演習を考えた場合、従来の英語クラスで行われてきた|英文法訳|は前者のstructural activitiesにすぎないが、"idiomatic translation"は後者のquasi-communicative activitiesに属するものといえよう。新出文法事項が少ない大学レベルの英語教育においては、|英文法訳|を卒業し、さらに一歩進んだ"idiomatic translation"を導入していけば、学習者がすでに備えている日本語力を効果的な橋渡し役、あるいは、補完役として活用し、さらに|コミュニカティブ|な英語発想に基づく英語学習活動へとつなげていくことができるのではないかと考える。

(参考文献)

- (1)|英語教育 9月増刊号、1994、pp109-127
- (2)Anthony, E. M. 1963 Approach, method and technique, English Language Teaching 17:63-7
- (3)Richards and Rodgers 1986 Approaches and Methods in Language Teaching, Cambridge University Press (p15)
- (4)Finocchiaro and Brumfit 1983 The Functional-Notional Approach: From Theory to Practice, Oxford University Press
- (5)Duff, A. 1989 Translation, Oxford University Press (p5)
- (6)田崎清忠 1978 英語教育理論、大修館書店 (p195)
- (7)米山朝二、佐野正之 1983 新しい英語科教育法、大修館書店 (p51)
- (8)Wilkins, D. A. 1974 Second-language learning and teaching, Edward Arnold
- (9)Duff, A. 1989 Ibid. (p7)
- (10)Snell Hornby, M. 1985 Translation as a means of language teaching and linguistics, Translation in Foreign Teaching and Testing, Gunter Narr Verlag Tübingen (pp21-28)
- (11)Perkins, C. 1985 Sensitizing advanced learners to problems of L1-L2 translation, Translation in Foreign Teaching and Testing, Gunter Narr Verlag Tübingen (pp51-72)
- (12)田崎、1978 Ibid. (p193)
- (13)語学教育論集9 語学教育に関する学生の意識調査、1994、早稲田大学語学教育研究所 (pp160-212)
- (14)教材英文は主に藤井、内野、1993、1994、|時事英語の総合演習1993年版/1994年版| (朝日出版社)をベースにして作成したもの。
- (15)高橋泰邦 1982 日本語をみかく翻訳術、バベル・プレス (p15)
- (16)柳父章 1979 比較日本語論、日本翻訳家養成センター (p196)
- (17)Larson, L. M. 1984 Meaning Based Translation A Guide to Cross-language Equivalence, University Press of America
- (18)Nida, E. A. 1969 The Theory and Practice of Translation, United Bible Societies (p39)
- (19)安西徹雄 1982 翻訳英文法、バベル・プレス (pp20-21)
- (20)レター英文は藤井、小西、内野、1994、|新アプローチによる国際ビジネス英語| (朝日出版社)より。
- (21)Littlewood, W. 1981 Communicative Language Teaching, Cambridge University Press (p86)